

漢字索引

ア

安 一オ2
 伊 九オ4
 一 一ウ3・八ウ4・一〇ウ1・一三オ11・一五オ3
 引 七オ27・一〇オ1・一二オ4
 又 一四ウ8・二〇オ78・二二オ8
 友 一五オ4
 有 六オ5・七オ6
 雨 二ウ5・八ウ7
 雲 五ウ6・八ウ8・一〇ウ11・一二オ2・二一ウ4
 葉 二ウ710・三オ4・三ウ1・八オ3・一一ウ6
 音 一五オ2・一七ウ8

嘉 一オ2
 何 六オ8・六ウ8・一五オ11・一六ウ1・一七オ7
 河 一七オ15・一九オ2
 我 一オ11・四オ2・六ウ5

カ

海 一八ウ2
 其 一二ウ11
 給 二ウ6・四オ77・四ウ2・六オ1・六ウ5・九オ1111
 更 九ウ2・一三ウ3・一五ウ2
 京 五ウ4
 行 二一オ7
 空 八オ411・九オ2・九ウ10・一一ウ2・一三ウ4・一六
 火 二オ2・一六ウ1・一七ウ2・二一オ1
 果 二オ6・三オ9・七ウ4・一三ウ6
 過 六ウ9・七オ59
 光 一九オ8
 婦 一七ウ1
 月 六ウ9・一五ウ10
 外 三オ7
 関 一オ4・二オ5・四オ16・五オ5・五ウ6811・六オ
 二・七ウ3・一〇ウ4610・一一オ2・一四オ811・一
 五ウ9・一九ウ4
 七オ9

君 四オ3
 一オ10・二二オ6
 二ウ7 10・三ウ2・六オ11・七オ10・八ウ9・九オ2
 一三オ11・一六ウ1・一七ウ4・一九ウ3・二〇ウ2・
 二一オ4・二二オ2
 二二オ2
 六ウ11・二〇オ11
 二ウ2 5・三オ8・三ウ2 3・四オ10・五オ7 8 9・五
 ウ10・六オ9・九オ10・一〇オ2・一四ウ1
 七オ5
 二ウ7 10
 七オ8
 二オ2・六オ6・六ウ2・七ウ2・八ウ11
 一ウ1
 一ウ8
 一ウ5・六オ10・一三ウ10・一四オ8・一五オ7・二二
 オ5
 五ウ3・一〇オ11・一〇ウ9
 六ウ9
 一オ2
 一二オ8
 一オ9 11・三オ6・四オ11・四ウ7 8 9 11・五オ7 10・

枝 侍 事 時 色 七 手 舟 秋 袖 出 春 所 松 鐘 井 成 心
 五ウ9・六オ4・九オ2・一〇ウ2・一一オ11・一四オ
 4・一五ウ5 8・一六オ7・一六ウ1・一七ウ11・一八
 オ9・一九ウ2・二〇ウ10・二一オ9
 二ウ10
 二一ウ5
 一オ3・七オ9・八ウ3・二二オ8・一七オ7・一七ウ
 11・二〇オ7 9
 二ウ5・一一オ7
 一ウ5 8・二ウ10 10・六オ10
 五ウ8
 六オ8・七オ1・一〇オ2
 二オ5・一七オ2 7 (二オ5は傍書)
 一オ6・一ウ9・一五オ1
 二オ6・四オ3
 七ウ11・一二オ7・一六オ3・一八オ10・二一オ4
 六オ7
 二ウ11・八オ2・一〇ウ2・一三オ3・一三ウ5・一四
 オ8・一六ウ6・一八オ5 7・二〇ウ11
 二ウ10・九オ5・一〇ウ10・一八ウ3
 四ウ4
 一〇ウ11
 八オ8
 一オ7 8 11・一ウ1 7・二オ3 10 11・二ウ2 4 10 11・三
 ウ3 4・四オ2 9・四ウ7 8・五オ11・五ウ9 11・六オ

身 神 水 吹 世 勢 宵 夕 折 雪 千 山

三・五・六ウ689・八オ1・八ウ11・九オ10・九ウ310
 一〇ウ11・一一オ510・一一ウ10・一二ウ7・一三ウ7
 一四オ15・一四ウ37・一五オ・一五ウ551011・一
 六オ24・一六ウ1・一七ウ11・一八オ2・一九オ47
 一九ウ7・二〇オ10・二〇ウ168・二一ウ231011
 二三オ5
 一ウ9・四ウ6810・七オ11・七ウ2・八ウ4・九オ3
 九ウ5・一一オ6・一五ウ611・一六オ2・一六ウ10・
 一八オ1・二二オ357
 二オ5・一五ウ9
 三ウ7・一一ウ2・一二オ5710・一五オ7・一六オ6
 一七オ8・一九オ2
 三オ2・一〇ウ10
 八ウ3・一〇ウ2・一一オ8・一一ウ78・一二オ7・
 一四オ4・二二オ7
 九オ4
 一ウ211・一三ウ7
 一五オ7
 七ウ6
 一九オ11・二一オ5
 一七ウ9
 二ウ9・五ウ7・八オ2457・八ウ57810・九ウ1
 9・一〇オ7・一六オ611・一六ウ7・一九オ11・二〇
 ウ3・二一オ7・二一ウ45

川 送 打 待 道 地 持 中 虫 竹 通 庭 程 朝 条 笛 都 冬 同

一二オ5710・一八ウ11
 一〇ウ11
 一ウ3・七ウ6
 一四オ6・一七オ4
 八オ11・一五オ10
 二ウ11・四オ9・九ウ10・一二ウ11・二〇オ110・二
 ウ3
 一四オ2
 二ウ2・一一オ8・一二オ10・一二ウ10・一三オ10・
 五ウ1・一八オ2・一八ウ1
 一オ7
 一二オ11
 一ウ3
 一オ6・一二オ11・一四ウ11
 一オ10・一ウ2・三オ3・三ウ4・六ウ8・八ウ7・
 四オ6・一七オ7・二一オ58
 一五オ7
 一オ2
 一四ウ1
 二〇ウ6
 六オ10
 一一ウ8

ナ

二

五ウ3
一五ウ9

廿

二オ8・三ウ4・四ウ2・五ウ38・六オ2・一〇オ11
一二オ2・一三ウ6・一四オ1・一五ウ89・一六ウ9
一七ウ1・一九オ4・二〇ウ710・二一オ7・二一ウ3
六ウ8・八ウ5・二一オ7
九オ7

入 女 人

二ウ5・三オ4・三ウ48・四オ5・四ウ4・五オ89
五ウ334・六ウ89・七ウ578910・八オ25・八
ウ22・九オ691010・九ウ6・一〇オ56710・一一
ウ37・一二オ47・一二ウ9・一三オ88・一四オ1
一四ウ5・一五ウ11・一六オ1・一六ウ78・一七オ1
44・一七ウ2・一八オ2・一九ウ610・二〇オ345
二〇ウ26・二一オ11・二一ウ1・二二オ210

ハ

波

一八ウ2
一三ウ10

半

三ウ4・七ウ3・一二ウ11

比

四ウ10

悲

三オ11・七オ10

筆

三オ2・五ウ2・一九ウ1

風

浦 仏 暮

一八オ3
二ウ2・六オ1・一〇オ2
一三ウ6

マ

名

一七ウ5
一五ウ10

明

八ウ11・一二ウ11

命

一ウ13・二オ3・三ウ10・四オ5・六オ5・八オ3・
一一オ8・一四オ4・一六ウ9・一九オ7

夢

二ウ9・八オ3・一四ウ9・一八オ8

木

一オ7・五ウ4・六ウ4・一五オ1011・一五ウ2

物

三ウ3・六オ9・七オ46

文

一オ2

門

三ウ2・四オ11・六ウ1・一三オ4・一四ウ1・一六オ

聞

6

ヤ

也

九オ8・九ウ11

夜

一ウ3・五ウ48・七ウ59・八ウ1・九ウ8・一一オ
9・一二オ3・一三ウ10・一五ウ8・一九オ5

屋

二一オ2

野

一六ウ7

猶

一一オ11・一四ウ6・二一ウ10

ラ

一オ8

二ウ1・五オ9

一六ウ5

五ウ11・九オ1・一五オ5・一六オ4

一一オ3・一七ウ2・一九オ4

一八ウ2

露路恋涙旅立乱

一オ6・四オ3・五ウ5・一〇オ9・一一ウ6・一四オ

ワ

一オ2・二ウ7

一八ウ4

院 絵

々

二ウ5910・一六ウ6・一七オ4・一七ウ2

	異なり語数	延べ語数		異なり語数	延べ語数
あ	64	174	の	13	322
い	49	178	は	35	250
う	50	92	ひ	39	123
え	4	4	ふ	32	72
お	87	220	へ	10	45
か	97	244	ほ	13	59
き	25	90	ま	35	105
く	29	56	み	45	153
け	10	78	む	15	48
こ	68	220	め	4	10
さ	47	114	も	26	227
し	49	148	や	27	89
す	26	109	ゆ	23	54
せ	11	17	よ	27	73
そ	20	76	ら	3	17
た	52	184	り	1	1
ち	8	25	る	2	23
つ	40	111	れ	3	9
て	8	143	わ	23	51
と	56	291	ゐ	4	12
な	64	344	ゑ	1	1
に	23	332	を	12	130
ぬ	6	118			
ね	6	18	計	1292	5260

この索引は凡例にも示したように東山御文庫本を底本とし、尊経閣文庫本・松平文庫本・扶桑拾葉集本および群書類従本を校本として、それら諸本の本文・傍書等を批校・勘案した語句をも少しく含んでいるし、また、古典語の複合意識にもとづいて、接辞や造語成分等を分出して項目を立てたり参照を施したりしているので、かならずしも厳密な語数の計算とはなりがたいが、この索引による『うたゝね』の異なり語数および延べ語数は次表のとおりである。

『うたゝね』索引による語彙考察

異なり語数は『竹取物語』⁽¹⁾のそれにほゞ匹敵する。延べ語数が竹取のそれよりはるかに少ないのは、全体の分量が少ないからであるが、時代が降って擬古文としての彫琢もそれなりに加わっており、極端な同語反復が少なく各語の使用度数が小さいためでもあると思われる。⁽²⁾

二

助詞・助動詞以外で使用度数の比較的多いもの、こゝろみに度数8以上の100語をあげると次のとおりである。(派生語の類をも含む。たとえば「憂し」には「心憂し・物憂し・ま憂し」も、また「憂瀬・憂人・憂身・憂世・憂さ」をも含めてみた。そのうち、8以上のものがあれば更に重出―「思ふ」における「思出づ・思続く」など。)

思ふ77	心66	す59	人56	無し52	有り48	成る45	出づ41	程40	いと37	見る35
心地29	山28	事27	打―所・見ゆ24	知る・立つ・行く23	方22	唯21	身20	―果つ・		
都19	憂し・来・心細し・月18	物・世・夜16	今・夢15	御―聞ゆ・様 ^{さま} 14	哀れ(に)・言ふ・帰					
(返)る・此処・此の・頃・―さ・何・物―13	音・覚ゆ・給ふ・寝る・又12	雨・多かり・暗し・―共・涙								
・降る11	恐ろし・斯く・影・悲し・彼の・聞く・雲・近し・果敢無し(げ)・待つ・道・水・居る・折10									
命・思出づ・搔―書く・川(河)・里・過ぐ・絶ゆ―路・続く・人知れず・目・宵9	怪し・如何に・いと									
ゞ(し)・入る・思続く・風・草・此れ・さすが(に)・其の・付く・取る・中・光・臥す・様に8										
「思ふ」に始まり「心」に続くこの表からは本書の日記文学・自照文学としての性格を如実にうかがうことが出来よう。『古典対照語い表』 ⁽³⁾ の諸作品と比較してみても「思ふ」や「心」を1・2位とするものは無いようである。										
思ふ	古今3	蜻蛉4	後撰5	伊勢・源氏8	枕・更級・徒然10	万葉・紫11	竹取14	土左19位	順	
心	源氏5	方丈6	後撰・紫・徒然8	古今10	蜻蛉14	万葉・伊勢15	竹取・更級18	枕19	土左20位	

の順

しかも『うたゝね』は「心地」を12位とする。「心地」は「心」に比して「事態からその場で受ける気分・感じ」を表わすといわれる。『古典対照語彙表』の一四作品中には20位までに「心地」を存するものは見えない。『うたゝね』はまさに「心地」の文学と言えるのではないか。更に「心」の中でも「心細し」がもっとも多く(18語・26位)、「思ふ」の中では「思出づ・思続く」などを多く含む。思出の中に心細く思続ける心地の表出、とでもいうことになるか。また、形容語の中でも「憂し・哀れ・物—(物憂し)など」・暗し・恐ろし・悲し・果敢無し(げ)・人知れず・怪し」など、マイナ斯的な心情語の使用度が高い。不幸な恋愛に傷ついた感情の吐露が作品の中核をなす次第を、これら多用語は雄弁に物語るものごとくである。

三

これら多用語のうち、もっとも注目すべきは「—果つ」であろう。

- | | |
|---------------------------|-------|
| おとるへはつる身もわれかのこゝちのみして | 一六ウ10 |
| むめがえの色づきそめしはじめより冬草かれはつるまで | 六オ10 |
| 月ごろわづらひ給けるがつるにきえはて給にければ | 四オ7 |
| きえはてんけぶりののちのくもをだに囃 | 一二ウ8 |
| こゝろの中ばかりにたくたしはてぬるはいとかひなしや | 一六ウ10 |
| かゝるよもぎがそまにくちはつべき契こそは囃 | 一二オ6 |
| 暮はつる空のけしきも日ごろにこえて心ばそくかなし | 一三ウ6 |
| くれはつるほどにゆきつきたれば | 二一ウ9 |

身をうき草にあくがれし心もこりはてぬるにや

一一〇五

心ならずも夢のかよひちたえ果ぬべし

一一〇八

いとちめはてつるいのちなれば

九〇三

たゞ一すぢになきになしはてつる身なれば

八ウ四

いつはりにさへならひはてにけることもあるにや

一一ウ八

つるにいかになりはてんとすらんと心ほそく

四ウ六

同じ世ともおぼえぬまでにへだゝりはてにければ

一一ウ九

かゝるわたりをさへへだててはてぬれば圖

一七〇九

いたくよ＊はりはてにければ

九〇五

さるべき人みなわたりはてぬれど人々もこしやむまと：

一七〇四

いとせめてわびはつるなぐさみにさそふ水だにあらばと

一五〇六

実に17語19例におよぶ。『源氏物語』にも「明かし果つ・飽き果つ」など104語を数えるが、源氏は約40倍の言語量(6)を有する作品であるから、率から言えば『うたゝね』は6倍強の高率となる。このうち半数以上の「衰へ果つ・朽ち果つ・懲り果つ・閉ぢめ果つ・習ひ果つ・隔たり果つ・隔て果つ・弱り果つ・渡り果つ・佗×び果つ」の10語は源氏に用例が見えない。また×印を付した6語は通行の国語辞書に未登載である。次節に述べるように、この作品は語彙の大部分を源氏に仰ぐ擬古文ではあるが、この「一果つ」に至ってはまったくの異例と言わなければなるまい。作者の語り癖というよりも、『十六夜日記』には「入り果つ・朽ち果つ」等10語を数え得るに過ぎないのであるから、本書の特徴的表現の一つと言うべきであろう。たゞ一途に突き進んで窮極的な限界状況に到達せざるを得ないとする心情的傾向性が、かゝる表現を多用させているのではないか。その意味でも『うたゝね』は純粋な青春時代の習作と言って

良いように思う。

四

凡例にも述べたように、この索引では各項目ごとに『源氏物語』に使用例があるかどうかを検証してみた。その結果、異なり語数一二九二語のうち、「御一」⁽⁸⁾など厳密には問題もあろうが、実に86%強、一一二〇語が源氏の用語であることが分かった。竹取・伊勢・宇津保物語や枕草子、古今・後撰・拾遺和歌集など、更には更級・寝覚・狭衣など、他の平安朝期仮名文学の諸作品に用例の見える語まで含めると、93%におよぶ。次節に述べるようにその他もおゝむね擬似平安朝語であるから、本書はほぼ完全に近い模範的な和文語作品といえよう。たとえば、これを手近な『新猿楽記』の語彙と比べてみよう。新猿楽記は藤原明衡撰と伝えられる記録文体による初期的往来物であるが、異なり語数二七五三語のうち、源氏用語は36%強、部分的に一致語や他の平安朝期仮名文学用語を含めても40%に過ぎない。もちろん新猿楽記は普通の雅文には現れにくい日常生活的な名彙を主とするものではあるけれども、それにしてもこの隔たりは注目に価しよう。『うたゝね』は地の文はもちろんのこと、会話文や消息においても、いわゆる漢文訓読特有語をほとんど含んでいない。その意味で、特殊な表現効果をねらって訓読語もかなり取り入れた源氏や枕以上に、あるいは「殆ど純粹に和文的なもの」と⁽¹⁰⁾いわれる伊勢や蜻蛉、紫・和泉式部日記など以上に、より純粹な和文語作品といってよいかと思う。習作的擬古文と規定せざるを得ない所以である。

五

残りの7%には次の諸語を含む。

A 固有名詞 安嘉門院四条・浜名浦・法金剛院・法輪など

B 誤写と覚しきもの あさま・ころせう・せぬれい・まはりはつ・ものけし等

C 現行辞書類に載録が無いか、あつても降つた時代の用例しか無いもの

C についてはすでに次田香澄氏が時代語の反映として「あよむ・おびたゝし・さればさらん・なをざりなく・くちろん」などを指摘しておられる。⁽¹¹⁾以下、Cについて重複を避けて別の観点から少しく述べる。

先に触れた「―果つ」の6語以外に次の諸語が現行辞書に見えない。

うちこわづくろふ(「うちこわづくる」は源氏に、「こわづくろひ」は古事談に見える)

かけとまる(「かけとどまる・かけとむ」は源氏に、カケトメ・ムル・メタは日ボ辞書に見える)

ひとい(偏)に・むかへ(向)の山(「ひとへに・むかひの山」はそれ〴〵源氏に見える。訛語であろうが中近世の文献には散見する)

生ひ続く・助け扱ふ・上り来る^{きた}・待ち慣る・漏り濡る・破り返す^や・歪み立つ(これらのうち「まちなる」は歌語であるから新後撰・風雅などに見える。いずれも大型辞書には登載すべきであろう)

「おちつきどころ・くちろん・めばやき」(落着所・口論以上、日本国語V、目早し入岩波古語V。メバヤナが日ボに見える)などはいずれも本書を初出とするが、「いたづらもの入史記抄・日ボV・おとろへはつ入狂言V・おもひくつ入後拾遺V・かきすつ入申楽談義・日ボV・しやうじぐち入源氏V・たちかさなる入増鏡・日ボV・なにといふ入狂言V・をりかさなる入日ボV」の諸語は時期的に早い本書の用例を出すべきであろう。また、「うみぢ(海路)・しみとほる・ぬれとほる・みちゆきびと」等、上代語としての用例しか無いものも本書の用例は恰好と思われる。このうち、「しみとほる」以下は日ボ辞書にも見える。その他、「心の丈入山家V・またかなる月入訓点V」など、歌語や訓点語としてだけでなく、散文の用例として貴重すべきであろう。

六

訓読特有語は稀であるとはいっても、さすがに時代の子であって、「あるいは・いたましむる・かつうは・きたる」等を拾うことが出来る。中でも、おそらくはこの系列に属するものとして接続詞の「なれども」には注意すべきであろう。

あやしくものくるをしきものゝさまかなとみおどろく人おほかるらめなれどもかつらのさと人のなさけにをとら
めやは
一〇オ6

『日本国語大辞典』は日蓮遺文と史記抄を挙げるが、この語は早く湯沢幸吉郎氏が史記抄と蒙求抄とを挙げて紹介されてお⁽¹³⁾り、近くは坂詰力治氏が書陵部蔵『魯論抄』の例に論及せられたところである。いうまでもなくこの語は、断定の助動詞「なり」の已然形に接続助詞の「ども」が付いたものではあるが、『うたゝね』のそれは、まさにその自立語化する過程を如実に示すものと思われる。抄物には「アレドモ・シタレドモ」などと共に普通に用いられる語であり、史記抄・蒙求抄・魯論抄などのほかに毛詩抄にも次のように現れるが、『うたゝね』のような仮名文学に使用されることは極めて異例と言わなければならず、本書の時代性を象徴するものゝごとくである。

其ナリ共只衛ノ一ニセイカシナレ、共国ノ風義別ナソ声カ別ナソ

巻二、二ウ9

殷ノ代ニモカヲ以テ取事ハ有タ程ニナレト、モマツ民カ楽処ハカウソ

同、三五オ4

なお、『日本国語大辞典』が丹波与作や真景累ヶ淵の用例を出しているように、江戸時代には一般に広く用いられるようになり、たとえば歌舞伎評判記などにも次のように現れる。

いかにしても懐妊とは見へざるよし、なれ共お子に極った子細は、折／＼お腹の中から物を仰らるゝ、あのはつ
めいさ…
正徳六年四月『芝居屋小袖』⁽¹⁶⁾ 17オ

今京大坂に、くらべてみる人がなさに、おのづから長十郎くともてはやす、なれ共、女中は、此人の芸はずんど前々からすかせらぬ(一七)

享保十四年正月『役者登志男(京)』12ウ

七

本書には「さすが」と「さすがに」とがそれごとく4例ずつあって、この索引では一往別項としてみた。すなわち次のとおりである。

さすがめもあはずみじろきふしたるに

五オ1

さすがそゞろおそろしかりける

七オ2

さすがひたみちにふりはなれなむ

一五ウ4

さすがならはぬひなのながぢにおとろへはつる身もわれかのこゝちのみして

一六ウ9

さすがにたえぬ夢の心ちはありしにかはるけぢめもみえぬものから

二オ3

さすがにおぼしいづるおりもやと心をやりて鬪

五オ11

おなじかやゝどもなどさすがにせばからねど

一八ウ6

さすがに心ぼそくて人見わくべくもあらず

二〇ウ1

いずれも副詞的用法であつて、「さすが」と「さすがに」との間に意味上の相違は認めがたく、また、5丁表には両者共に用いられているように場面的な差異も見出しがたいのである。ところで、源氏物語には「さすがに」は265例もあるのに「さすが」はわずかに3例のみ、しかもその3例は『源氏物語大成校異篇』によればいずれも別本には「さすがに」と見える。つまり、源氏では「さすがに」なのである。ところが平家物語では「さすがに」はたゞ1例に過ぎず他の39例はすべて「さすが」である。(一七)源氏と平家との間にはかくも截然たる区別が厳存するのである。中古

仮名文と中世和漢混淆文とではそれだけの隔たりがあることを、この「さすがに」から「さすが」への推移は示しているようである。こゝにおいて『うたゝね』のそれが4対4であることはいかにも象徴的とは言えないか。『源氏物語』を頂点とする仮名文学を模範とし目標としたであろうこの擬古作品が「さすがに」を残し、『平家物語』の動乱時代以後を生きた作者の言語感覚が「さすが」を生んだ。それは、おそらくは意識的では無かったであろう。しかし、そこにはおのずから、規範に現実が、守株に進取がはたらき合ったに違いない。この一事をもって、そうした相剋や葛藤があい半ばし均衡し合った時点でこの作品は成った、と想定することはあまりにもうがち過ぎであろうか。

ほかに「いまさら・いまさらに」が1例ずつ見える。これも源氏では「いまさらに」、平家では「いまさら」の対立を成す。また、底本の「あながち」に対して扶桑拾葉集本と群書類従本は「あながちに」とする。「あながち」も平家に見える語であるから、おそらくは底本系の「あながち」を源氏流に「あながちに」と改めた類従本系のさかしらであろう。このように国語史の知識は本文批判にとっては有用不可欠なのであるが、いずれにしてもこれらの事実とは、『うたゝね』の語彙の歴史的位置を示すものというべきであろう。

八

最後に位相語のことに触れてこのさゝやかな報告を終えようと思う。この索引では『竹取物語絵索引』に倣って、文例に鬮・鬮・鬮の様相の別を示して参考に供したこと、凡例にことわったとおりである。「か・かし・かな・がな・けむ・こそ・まし・む・や」などの、いわゆる陳述性の強い助詞や助動詞の項に鬮が多く付いているのは当然のことであるが、こゝでは次の二点について述べておきたい。

一つには本索引では鬮の中にしか現れなかった語についてである。

きえかへりまたはくべしとおもひきや^國

一四ウ10

いわゆる過去回想の助動詞「き」は、連体形の「し」29例、已然形の「しか」5例を数えるが、終止形の「き」はこの1例のみである。もっとも源氏においてもほゞこの割で終止形の「き」の用例は少ないのではあるけれども、^國の中だけに1例見るのみで地の文に皆無という状況は、抄物等で「き」が急速に衰退し、⁽¹⁹⁾「し」のみとなってその用法も固定化してしまう傾向に符合するものゝごとくである。

しのばぬ人はあはれともみじ^國

二二オ10

くもをだによもながめじな人めもると^國

二二ウ8

の2例を^國の中に見せるのみの、いわゆる打消推量の助動詞「じ」もまた、衰退の助動詞である。口語の世界ではやがて消えて行くわけであるが、これまた、もはや地の文には現れず、歌語としてのみ化石的に残存して行く傾向を暗示するものと思われる。

第二には「みづから」が2例共に男の消息文中にのみ現れるという点を注意しておきたい。

つれなきよのあはれさをみづからきこえあはせたく^國

四ウ3

さるべきつゐでもなくてみづからきこえさせず^國

一一ウ6

「みづから」は源氏にも用例は見えるが訓読語系の語であって、『うたゝね』のこの事実は、すでに改まった文章語的存在の男性語であったことを示すものと思われる。ロドリゲスが『日本大文典』において

ワガミとミヅカラは往々にして男子の莊重な談話に用ゐ、汝自身、彼自身といふ意味を示す⁽²⁰⁾ (傍点筆者)

と述べていることに繋がって行くものであろう。

九

以上、やゝ断片的な記述に終ってしまつたが、『うたゝね』索引を編してみても、いさゝか気づいた諸点をまとめみた。本書利用の上でなほどうかの参考になれば幸いである。

(七五・九・五)

付記 「漢字索引」で明らかなように底本の東山御文庫本『うたゝね』の中で用いられている漢字の異なり字数は一三六字、延べ字数は六〇四字である。

注

- (1) 『竹取物語総索引』(山田忠雄編、一九五八年六月)四四四ペ「おぼえがき(二)」に異なり語数二二八六、延べ語数九七六八と計算されている。異なり語数や延べ語数のような、語彙論上の基本的事項を索引に付随した調査記録として掲げる先例を右索引では示されているにも拘らず、その後簇出した索引類がこれを学ばないのは遺憾である。
- (2) 『竹取物語』では4位まで(給ふ・言ふ・有り・す)が10を越し、10位までが70を上回る。『うたゝね』では70に達するのは1位の「思ふ」のみ。ちなみに、『竹取物語』の詞の承接の重複指示については、かつて触れたことがある(「天草本伊曾保物語の文章」日本大学文学部研究年報・昭和三十一年度)。
- (3) 宮島達夫編(一九六九年二月)三三七ペ「上位20語の表」。多くは「有り・人・言ふ・事・す」等が1・2位を占める。
- (4) 『岩波古語辞典』(大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編、一九七四年二月)
- (5) 『源氏物語大成』(池田亀鑑編、一九五三年八月)索引篇
- (6) 『古典対照語彙表』では源氏の延べ語数を二〇万七八〇八語とする。
- (7) 『十六夜日記校本及び総索引』(江口正弘編、一九七二年八月)
- (8) 『うたゝね』の「御一」はすべて漢字表記であつて、これだけでは「おん一」であつた証明は出来ないが、一方、源氏の方でも、「おん一」は院政時代以降に現われたといふものゝ、現存本の表記の上からはかならずしも一律に「おほむ一」と一部の「お一」とのみとは決しがたい面もあるので、語によつては「おん一」もあり得たと見て源氏用語の内と処理した。
- (9) 拙稿「新猿蓑記の語彙一付、語彙索引」(山梨県立女子短期大学記要第八号、一九七五年三月)

- (10) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(築島裕著、一九六三年三月)第六章「仮名文学と漢文訓読」七八一ぺ
- (11) 『うたゝね』考一付・東山御文庫本(翻刻)一(二松学舎大学論集、昭和四十七年度)
- (12) 用例の拠ったテキストが良くなかったためであろうか、「やまがつ」を「山賊」に誤る。
- (13) 『室町時代の言語研究』(一九二九年一月)二五三ぺ
- (14) 『東洋大学大学院紀要』6(一九七〇年三月)「国語資料としての抄物―書陵部蔵『魯論抄』をめぐって―」
- (15) 『抄物大系・毛詩抄』(中田祝夫編、一九七二年二月)(上)
- (16) 『歌舞伎評判記集成』第六卷(歌舞伎評判記研究会編、一九七四年一〇月)
- (17) 『平家物語総索引』(金田一春彦・清水功・近藤政美編、一九七三年四月)によれば、「さすが」の項目には「さすがなれば」を2例、「さすがにて」を1例含み、「さすがなり」の子項目「さすがに」には「さすがにて」1例を含む。コンピュータの仕事では副詞と形容動詞の区別のごときは無理のようである。「あながち」の項においても同趣の混乱が見られる。
- (18) 前記「うたゝね考」において次田氏は、『十六夜日記』に比して「うたゝね」の用語の一部に新しさが見られる点について、晩年の社会的地位と家庭環境とから作者は守旧的に傾斜したと指摘しておられる。『うたゝね』と『十六夜日記』との比較考察は、なお今後の課題であろう。
- (19) はやく『日本文法史』(小林好日著、一九三六年九月)において「時の助動詞のうち「き」はもっとも早く影をひそめた」(一九二ぺ)と述べられている。ちなみに、『うたゝね』における時の助動詞は「けり」53・「たり」59・「つ」22・「ぬ」97・「り」〔る〕のみ)4例という使用状況である。
- (20) 『日本大文典』(土井忠生訳注、一九五五年三月)二六六ぺ